乳・幼年期における音楽教育 (6)

—— 音楽的活動の統合性と系統性 —— 井上 徳雄
(九州女子短期大学)

1. 研究目的

「乳・幼年期」(乳児から小学校1・2年まで)の音楽教育で、それぞれの音楽活動に見られる「統合性」や「系統性」について考究する。

2. 研究目的設定の基盤

- (1) 新幼稚園教育要領(以下「新教育要領」という)の領域(主として「表現」と、従来の領域「音楽リズム」との関係、更に、改訂された小学校指導要領(以下『新指導要領』という)の「音楽科」との関係等。その新しい強調面についての検討が必要である。
- (2) 現実的な問題として、小学校はもとより、幼稚園、保育所(園)(以下「幼・保」「小」と呼ぶことがある)の音楽学習は、教材、題材(歌唱曲、器楽曲等)を中心に行われることが多い。又、音楽会、発表会、運動会等のイベント参加を目的として、技能面を強調した指導が行われている。これが、幼年期の子供たちの豊かな音楽性を養ううえに、どのような効果、影響を与えていくか等についての検討も必要である。
- (3) 「階名で模唱したり暗唱したりする。(小1、小2)(・・点は筆者、以下同じ)」「楽曲の気分や音楽を特徴づけている要素を感じとって、工夫して表現できるようにする(新指導要領)」と、「豊かな感性を育て」「感じたこと考えたことを表現しようとする意欲を養い、創造性を豊かにする観点から」の領域「表現」(新教育要領)との関連等、「幼・小」の特性に応じた具体的な考察が必要である。
- (4) 「豊かな感性、創造性を育てる」には、具体的な「歌う」「ひく」「動く」「聞く」「話す」「見る」「比べる」「覚える」等の活動が総合的に行われ、更に、それは、リズム、拍、音程、音階、速度、強弱、フレーズ、発声、発音等の要素的機能が作動して来る。領域「表現」の観点と、これらの要素的、系統的な活動がどのように関連するか、具体的な考察も必要になって来る。
- (5) 又、「新教育要領」では、「各領域に示すねらいは幼稚園における生活の全体を通じ幼児が様々な体験を積み重ねる中で相互に関連をもちながら次第に達成に向うものであること」「内容は具体的な活動を通して総合的に指導されるものである」等、体験の「積み

重ね、や総合的な指導を強調している。

(6) 本論文では、上記(5)の「総合的な指導」と関連しながら、乳・幼年期の子供たちの特性である未分化で原初的な状態を「統合性、統合的」と規定し、更に、その内容(活動)の連続によって形成される知識、理解、技能、態度等の変容や発展の方向を、「系統性、系統的」と呼ぶことにしている。

3. 研究計画と方法

- (1) 新旧の幼稚園教育要領の「音楽的活動」についての扱いの比較、新旧の小学校学習指導要領「音楽科」の「目標と内容」についての比較、更に新教育要領の(領域「表現」と、新指導要領の「音楽科」との関連的な検討。「幼・小」それぞれの改訂に伴う実践的な変容や問題点等について、具体的に検討する。
- (2) 現在「幼・保」で、日常的に使用されている歌曲や器楽教材、リズム遊び、指遊び、劇遊び、テレビやレコード等の視聴状況、音楽会、発表会等の行事にかかわる指導等の現状や問題点をさぐる。
- (3) 特に、「歌唱曲」の扱いについて、その選択、指導計画への位置づけ、指導の「導入」や「深化」の過程等、現実的に把握する。
- (4) 幼児の「個性」「主体性」「創造性」を生かす指導と、斉唱や輪唱、部分合唱、グループ唱等の集団的な「表現形式」との関係や問題点をさぐる。これは、器楽、動きや劇表現等の分野についても同様である。
- (5) 音楽の「統合的な指導」と。これを形成する各分節、各要素の習得の個人差について把握する。それぞれの子供たちに育つものは何か、グループや学級集団等への広がりなど、「評価の観点」を明瞭にしなが実践的に究明していく。

4. 研究の過程と考察

- (1) 音楽的な活動の「統合性」を生かす実践と問題点
  - A. 「季節、自然、身近な動植物など」から、幼児自から着想し、選択した「歌曲」を、その対象(環境)と一体に表現する。

(例) 「はる」「ちょうちょ」「つばめ」「あさがお」「あめ」「きくのはな」など——
  - (ア) 季節や天候、親しく接触する「身近な動植物

などに関連して自然に歌唱できるものは、幼児の個人的な発想を生かしながら、グループや学級等へ広がるものが多い。

ゆ これらの「歌曲」は、格別な「導入的扱い」をしなくても、いわゆる「環境」と「統合」しながらその表現を楽しむことになる。

イ 園内外の行事（伝統的、社会的、園内行事等）に参加しながら、自然に音楽的な活動と結びつく。

（例）——「ひなまつり」「こいのぼり」「たなばた」「お月見」「節分」「お店ご。こ」など——

(ア) 地域や（幼・保）の行事による「音楽的活動」は、幼児にとっても親しみ易い。

イ) しかし、運動会、生活発表会、お遊戯会等、伝統的、定例的に開催されている行事には、その目的、規模、方法等について幼児の立場からの配慮が必要な場合が多い。「新教育要領」では「生活と遊離した特定の技能を身につけさせる偏った指導」への警告。行事は、「教育的価値を十分検討し、——幼児の負担にならないよう」と指摘している。

ウ) 以上のア、イ、の指導のためには、①季節・行事に応じた教育環境作り（飼育栽培、写真、絵本、おもちゃ、素材等の準備）②季節・行事等にちなんだ「歌曲」などをBGMとして流す。（音響的な環境）③楽器やレコード、カセットテープなど幼児の身近に置いて自由に操作させる。④オルガン、キーボード、タンブリンなど幼児に親しまれる楽器も、出来るだけ使用させる。これらの環境への幼児の反応を見ながら、タイムリーに賞賛や助言を行ったりする。

ウ) 簡単なストーリーや登場人物のある歌曲、伝承童話等に関連する歌曲を中心に、劇化したり、人形劇、紙しばい、ペープサート等での表現を行う。

(ア)（例）——「うさぎとかめ」「浦島太郎」「大きなかぶ」（ロシア民話）などの話を聞いたり、絵本、テレビ等から、ストーリーやせりふを考えたりして、友だちと「劇あそび」をする。

(イ) 既成の歌曲を「演劇的」に表現する。

（例）——「どんぐりころころ」「いぬのおまわりさん」「おもちゃのチャチャ」など——
動作化したり、せりふを入れたり、替え歌を作ったりして、登場人物になり切って歌う。簡単なお面、衣裳、小道具、背景などを作って、ステージで演じることも出来る。（※ 役は適宜、交替する）

エ. 「歌唱」「器楽」「動きのリズム」等の音楽的分野を、「統合的」（総合的）に指導する。

○ 幼児の身近な生活や環境、メルヘンなど空想的

な世界を主題とした「歌曲」を中心に、統合的（総合的）に表現させる。

（例-1）こいのぼり（えほん唱歌）

① 「こいのぼり」を園で見たり上げたりする。

② 「こいのぼり」にちなんだ話を聞く。

③ 「こいのぼり」の歌に合わせて動いたりする。

（3拍子 ♪♪♪ のリズムを感得する）

④ 色紙などで「こいのぼり」や「かぶと」など作って遊ぶ。（以上のような活動を、関連的に行う。）

（例-2）やぎさんゆうびん（読みお作詩・田伊勢作）

※ 手紙を読まずに食べてしまった「しろやぎ」「くろやぎ」のユーモラスな「手紙問答」を歌やせりふなど入れて、劇的に表現する。

(2) 音楽的活動の「多様性」と「系統性」と問題点

これまで、前項の(1)のアで季節や自然、身近な動植物等との関連、イで園内外の行事や生活の流れから、ウの簡単なストーリー性をもつ歌曲の扱い、エで歌唱、器楽、動き等の音楽的分野の統合的（総合的）指導の概略を述べて来た。これらの表現活動には、①音楽的な諸要素の理解や技能等の発達や系統、②家庭や民間の音楽教室等、公的な教育機関以外で行われる音楽教育との関係、③テレビ、レコード等の音楽的環境、④小学校1学年から開始される「リズム聴取」や「リズム唱（奏）」「階名唱」との関係等、様々な問題を抱えている。

5. 総括と課題

以上、乳・幼年期の未分化な特性から来る「音楽的活動」の統合的（総合的）な指導の重要性について述べて来た。そのためには、①音楽の各分野を始め、言語、演劇、描画や造形、自然や社会等、環境との関連、②一人ひとりの子供たちの成長・発達過程を客観的に把握するための「系統化」「客観化」が必要なことを述べて来た。③これが、豊かな個性、感性、創造性を培い、「心情、意欲、態度」などの育成を重視する「新教育要領」の趣旨と、どのようにかかわるか、その問題点は何かなど、今後、具体的、実践的な検討が必要になって来る。④特に、歌唱や身体表現などを集団的な「しつけ」の手段としたり、リズムや和音聴音などの機械的、訓練的な指導等への反省が、当然、必要になって来る。⑤要は、教育要領、指導要領改訂の曲り角に立つ現在、「音楽的活動」の子供の立場からの見直し、指導計画への位置づけ、温い自配り、気配りのきいた「楽しい活動」の展開やその評価等、新たな実践的な課題が山積しているように思う。